

中国語擬声語の歴史的な変化の研究

—— 擬声語「吧」を例に ——

A study of the historical change of Chinese Onomatopoeia

—— in case of 'Ba' ——

李 夫 平*

LI Fuping

(要旨)

自然音の模倣として言語へ導入される擬声語には歴史的な変遷における語音、語形、語義の変化が生じると考えられる。中国語の擬声語の場合、語音、語形、語義の変化によって通用語や多義語となる現象が見られる。擬声語を共通語の標準に合わせるには擬声語の用字、発音と意味などの要素を考えなければならないため、それらの要素の歴史的な変化状況を調べる必要がある。本論では、「吧」を取り上げ、単音節擬声語の「吧」と「吧」を第一字とする多音節擬声語の歴史的な変化を考察した。

結論として、「吧」のような単音節擬声語でも「吧」を含む多音節擬声語でも、通用語などの現象がよく見られる。従って、歴史的な言語の変化に伴って、擬声語の意味などの面で、時代により変化した傾向が見られる。また、変化の過程で通用語現象なども生じるため、擬声語の使用の規則性を見ることは難しい。

1 始めに

1.1 擬声語変化の研究について

擬声語の変化について、F・de Saussure (フェルディナン・ド・ソシュール) の『Course in general linguistics』の「First principle: the sign is arbitrary」(「第一原理—記号の恣意性」)¹に、擬声語の語音と語形の歴史的な変化について次のような記述がある。

正規の擬声語については〔glou-glou,tic-tac などの型のもの〕、さほど数多くないばかりか、その選択はすでにある程度、恣意的である。なにがしかの噪音の大まかな、すでになかば慣例的な模倣にすぎないからである〔フ

ランス語の ouaoua とドイツ語の wauwau を比較するとよい〕。そのほか、いったん言語へ導入されると、他の語がこうむるような音声学的、形態論的ほかの進化に、多少なりとも引き込まれる²。

つまり、自然音を模倣した「正規の擬声語」さえも、ある程度自然音と似ており、それに「なかば慣例的な模倣に過ぎない」のであるが、さらに、最初の擬声語³と比べると、言語に吸収された擬声語は多少の変化がおこったに違いないというのである。これに関して、野間秀樹(2001)は、「オノマトペかどうかの境界は言葉を共時的な表面の中(語種論)で考えるのか、それとも通時的な時間の流れ

* 山口大学大学院東アジア研究科 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

の中（語源論）で考えるのか」と言っている。これは、言語の歴史的な変化を指す。さらに具体的に言えば、擬声語の歴史的な変化の研究は語音、語形、語義などにかかわる語源論の内容⁴から論説する必要がある。

中国語擬声語の歴史的な変化を発音、用字、意味などの面から研究したものに、まず、耿二嶺（1986）の『漢語擬声語』がある。耿二嶺はこの研究著作の中で、中国語の擬声語の歴史的な安定性について述べている。そして、それに対して、2つの面から説明している。一つは擬声語の変化は主に言語内的な要因によって引き起こされるのであって、社会制度や政治情勢などの言語外的要因は限定的であると指摘している。もう一つは、擬声語は音韻変化による影響がはっきりしないことである。言い換えると、語音が変化しても擬声語の語義は変わらないまま使用され続けてきたということである。古代に使用され、現在まで使用され続けている擬声語は多く存在する。

擬声語の言語音と自然音の関係⁵の一つは、擬声語の安定性は自然音に頼るものである。つまり、擬声語の語音、語形、語義などは言語の発展にともなう様々な変化が生じるとしても、模擬対象の自然音から大きく乖離しない。「正規の擬声語」であっても、歴史的な発展の過程で、新しい発音が出現したり、ある発音がなくなったりすることや、語形でさえ変わることや、その語が一般語彙の品詞になることなどがあるかもしれない。そのほかに、擬声語の意味の歴史的な変化も見られる。具体的に例を出して説明すると、擬声語の歴史的な語形（用字）の変化は注意されるべきである。その語形の変化は一般的に通用語の現象であり、その現象は顕著である。例は、耿二嶺（1986）に挙げられている。例えば、叮瑯－釘鑄－丁瑯－叮當－叮嚕－丁當、驢研

－碌研－礮研－粵烹－乒乓⁶などである。これらの例は多音節擬声語である。多音節擬声語の場合、通用語の使用はよく見られる。それでは、通用語は擬声語の使用に影響を与えるのであろうか。

1.2 中国語擬声語変化の先行研究

中国語擬声語の歴史的変遷に関する先行研究には大きく分けて二種類ある。一つは文献資料中の擬声語の使用状況の研究である。それは主に異なる時期の擬声語の数量、形態の特徴と文法的特徴などである。一般的にそれらの研究は各時代のもっとも代表的な文献資料を対象にして行われたものである。例えば、「元人雜劇中的象声詞」⁷で、趙金銘（1981）は臧懋循の『元曲選』から240語の擬声語を統計し、擬声語の形態別にデータを出すことを通して、異なる形態の擬声語の使用率を示している。そして、『元曲選』の用例によって擬声語の文法上の使用状況を説明している。野口宗親は「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』」（1993）⁸と「明代の「象声詞」」（1997）⁹から、清代と明代の擬声語の形式、用法、使用状況を現代語の擬声語と比較したうえで、擬声語の語音構造の型、歴史的な発展過程及び使用状況などを考察している。

もう一つは擬声語の音韻研究である。この方面の研究は豊富である。例えば、馬慶株（1998）は「擬声語研究」¹⁰で擬声語の音韻構造の特徴から、異なる形態の擬声語の使用状況をまとめ、擬声語の形態の変化に伴う音韻の特殊な変化を説明する。儲泰松（2012）は「普通話擬聲詞的語音規律及其例外」¹¹で、『現代漢語詞典』（第5版2006年発行）の擬声語の声母と韻母の使用状況を調べ、音節特徴と韻尾の特徴から擬声語の声調について論じている。ほかの音韻研究として、朱德熙（1982）

「潮陽話と北京話重疊式象声詞的構造」¹²、孟琮（1983）「北京話の擬声詞」、竺家甯（1995）「論擬声詞声音結構中的邊音成分」¹³、王洪君（1996）「漢語語音詞的韻律類型」¹⁴などがある。擬声語の用字と語音の変化を音韻変化の視点から論じているものは、擬声語の系統的な研究に役立つであろう。

一方、中国語擬声語の語義の変化情況及び特徴の研究としては、武田みゆき（2001）『中国語にみる共感覚についての一考察—擬音語の擬態語化を巡って—』¹⁵や趙寅秋（2014）『擬音語の擬態語化についての日中対照研究—日本語「ABAB」型オノマトベ両用語と中国語「ABB」型形容詞を例として—』¹⁶などがある。

以上の先行研究を参考にして、単音節擬声語も独特な使用特徴と変化特徴を持っている可能性があることがわかるため、本論ではそのような内容を巡って、主として単音節擬声語を取り扱うとともに、関連の多音節擬声語の研究も取り出して、詳細に擬声語の語音、語形、語義などの歴史的な変化を明らかにする。

1.3 中国語擬声語の管窺的使用現状

現在の中国語擬声語は日本語に比べると多くはない。数量の面で擬声語の実態を知るために、主に辞書に載っている擬声語を調べた。例えば、専門の擬声語の辞書の場合、相原茂の『現代中国語擬音語小辞典』（1976）には264語、徐一平の『中国語擬声語辞典』には281語、龔良玉の『象声詞詞典』（1991）には約800語、野口宗親の『中国語擬音語辞典』（1995）には425語が収録されている¹⁷。また、普通の辞書（字書と辞書など）の場合、『新華字典』（第九版1998年）には表示された擬声語が116語あり、『現代漢語詞典』（第五版2006年）には249語ある¹⁸。一方、専門研究の場合、李鏡兪（2007）『現代漢語擬声詞研

究』¹⁹によると、現代中国語擬声語が845個あり、その中で単音節擬声語が167個で、2音節擬声語が321個である。

このように、辞書や論文によって、擬声語の数には大差がある。原因はいろいろあるが、その一つとして、擬声語の標写形式²⁰が挙げられる。つまり、上の統計の差異が存在するのは、「音同形異」「音近形異」²¹などのような標写特徴を持つ擬声語に対する帰納方法、あるいは収録基準が異なるかもしれないからである。それに関して、耿二嶺（1986）は「音同形異」、「音近形異」などの現象を言語規範と言語変化の角度から述べている。

それでは、これらの現象は擬声語の意味変化及び擬声語の変化に何か影響をもたらしてきたのであろうか。この問題を探求するために、「吧」を例にして検討してみる。

1.4 擬声語「吧」を研究対象にする問題提起

1.4.1 擬声語「吧」の通用語現象

まず、近年単語の「吧」の品詞特徴が注目されている。特にその終助詞（語気詞）の品詞の研究もよく見られる。また、「吧」は動詞と擬声語という品詞属性を持っている²²。しかも、擬声語は動詞よりも早く使われた属性であるようである。しかし、「吧」の擬声語の品詞面の関連研究はあまり関心を持たれていない。そこで、擬声語以外の他の品詞は「吧」の擬声語の変化にどのような影響を与えたのか検討してみる。

次に、擬声語の用字による問題についてである。1.3に述べたように、同じ意味を表わす擬声語を異なる用字で表記する場合がある。「吧」にもそれが表れている。

中国語の単音節擬声語「吧 (ba)」及び「吧」を第一字とする多音節擬声語の標写情況について、擬声語辞典や現代中国語の代表的辞書である『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』な

どの資料から例を取り出すと次のようである：

- 吧：『漢語大詞典』、『現代漢語辭典』、『現代漢語大辭典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辭典』、『現代漢語擬声詞研究』
- 吧吧：『現代漢語擬声詞研究』、『中国語擬音語辭典』
- 吧嗒：『漢語大詞典』、『現代漢語辭典』、『現代漢語大辭典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辭典』、『現代漢語擬声詞研究』
- 吧嗒吧嗒：『中国語擬音語辭典』、『現代漢語擬声詞研究』
- 吧嗒²³（吧哒）：『漢語大詞典』、『現代漢語大辭典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辭典』
- 吧踏：『漢語大詞典』
- 吧嗒：『漢語大詞典』、『現代漢語大辭典』
- 吧啞：『漢語大詞典』、『現代漢語大辭典』、『中国語擬音語辭典』
- 吧噤：『漢語大詞典』、『現代漢語辭典』、『現代漢語大辭典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辭典』、『現代漢語擬声詞研究』
- 吧喇（吧喇吧喇）：『現代漢語擬声詞研究』
- 吧哪吧唧吧啦吧啦：『現代漢語擬声詞研究』
- 吧呀：『現代漢語擬声詞研究』

上記を見ると、「音同形異」の擬声語のほ
うが多い。その中の「吧嗒」、「吧踏」、「吧啞」は「吧嗒」の通用²⁴語と見なされて、『漢語大詞典』に載っている。それに対して、『現代漢語大辭典』で、「吧哒」、「吧嗒」と「吧啞」は通用できると述べている。これらの例は「吧」を第一字とする多音節擬声語を主とする部分であり、「吧」以外の用字のみが変化したものである。

一方、単音節擬声語の「吧」及び「吧」を含んだ多音節擬声語の通用現象もある。

- 『現代漢語辭典』：叭（bā）— 吧（bā）
- 『漢語大詞典』：吧吧（bā）— 叭叭（pā）

もう一步進んで、その二者の関係を検討するには、他の例が必要である。そのため、「叭」²⁵の文字を含んだ擬声語を、次にあげる。

- 「叭」（bā）：
- 叭：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』、『現代漢語詞典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辭典』、『現代漢語擬声詞研究』
- 叭叭：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辭典』
- 叭嗒（叭哒）：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辭典』
- 叭啞：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』、『中国語擬音語辭典』
- 叭嗒：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』、『中国語擬音語辭典』
- 叭啞：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』
- 叭唧：『中国語擬音語辭典』、『象声詞詞典』

pā音の「叭」を含む擬声語は、出典が『漢語大詞典』と『現代漢語大詞典』のみである。擬声語の情況は次のようである。

- 「叭」（pā）：
- 「叭」：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』
- 「叭叭」：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』
- 「叭啞」：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』
- 「叭啦」：『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』
- 「叭嗒」：『漢語大詞典』
- 「叭啞」：『漢語大詞典』
- 「叭啞」：『漢語大詞典』

叭嗒（叭哒）、叭啞、叭啞が通用できるのは『漢

語大詞典』と『現代漢語大詞典』で説明している。

上記の統計は擬声語の「音同形異」の特徴が見られる。「bā dā」という発音の擬声語は多くある。例えば、「吧嗒」、「吧哒」、「吧踏」、「叭哒」、「叭嗒」、「叭嗒」などである。しかし、それらの擬声語の用法に対する解釈はあまり詳しく記述されていない。「吧」と「叭」ではじまるほかの擬声語もそのような状況である。そのため、「吧」と「叭」ではじまる擬声語の語義の差異が存在するかどうかはわからず、使用の状況も区別しにくい。自然音を模倣する時、「吧」と「叭」のどちらが使われても相応しい時もあり、該当しないこともあるであろう。それで、擬声語の通用語の異なりを検討してみることも本研究の課題である。

そのためには、語形の角度から擬声語の変化状況を捉える必要があり、語形の規範意識の内容にも言及しなければならない。擬声語の語形の変化について、耿二嶺(1986)も例を出しているように、吃吃-赤赤-嗤嗤-叱叱-刺刺、磕噉-磕喳、噗腾-噗通などは多くある。また、『漢語擬声語』(157-158頁)には、60組の擬声語があげられている。

ゆえに、擬声語の「吧」は発音、語形と意味の面で歴史的変化が起こったことは明らかである。では、それらの変化の原因、過程と影響はどのようなであろうか。それらの問題を解明すれば、中国語擬声語の使用現状をある程度で提示できる上に、擬声語全体の歴史的な変化の概観を把握することに役立つであろう。そのため、本論では、「吧」を含んだ擬声語を例として、その歴史的な変化状況と使用現状などを明らかにする²⁶。

1.4.2 擬声語「吧」の多義情況

現代語では、「吧」はbāとba(軽声)の二

つの発音で読まれる²⁷が、擬声語として使われる「吧」の発音はbāである。

筆者が入手した資料によると、「吧」のもっとも古い記載は、1008年に編纂された『廣韻』²⁸である。しかし、『廣韻』には、「吧呀」の用例が二つある²⁹のみで、単音節語「吧」の用例は一つもないため、当時の「吧」が擬声語であるかどうかは不明である。その後、清代に至って、単用型の擬声語「吧(bā)」³⁰が『兒女英雄伝』(1878年)などの作品に多く使われてきた。870年の過程に、擬声語「吧」の発音がなくなり、語義の増減などに伴い、変化が生じた。

擬声語「吧」の多義情況は現代の辞書に次のような例が挙げられている。

『現代漢語辞典』：①槍声(銃声) ②物體
斷裂声(物が折れる声)

『象声詞詞典』：①物折斷声(物が折れる声)
②槍声(銃声) ③撞擊声(衝擊音)

『中国語擬音語辞典』：①張られた糸・網・
弦などが急に切断されたときに出る音
やその様子 ②口や臉の開閉する音

擬声語は上記のような多義性、つまり言語音と自然音との一對多あるいは多對一の写像関係の多様性が存在するからこそ、隣接の擬声語³¹との間に、通用現象あるいは交替現象などが出ているのである。1.2.1に述べたごとく、現代語の擬声語「吧」もその一例である。

2 擬声語「吧」の歴史上の情況

2.1 中国語擬声語の変化

擬声語のどうしても見落としてはならない特徴は自然音の模倣である。客観的な自然音を根拠としているにしても、時代や地域や使用場面などによって擬声語は変化する。例え

ば、「簡兮簡兮 方将萬舞」（『詩経・邶風・簡兮』）の鼓の音を模倣する「簡」と、「雷填填兮 雨冥冥」（『楚辞・山鬼』）の雷の音を表す「填填」は、現在ほとんど使われていない。その理由の一つは、音韻の歴史的な変化であるかもしれない。音韻の変化なので、「簡」と「填填」の現在の言語音は上古と異なる。それで、上古、その言語音は自然音と似ていたかもしれないが、現在その特徴は薄くなった。また、「父」と「母」は最初擬声語であった。陳北郊（1989）³²によると、古音（上古音）の「父」は現在の「爸」の発音と似ており、「母」は「媽」の古音である。現代語の「父」と「母」は擬声語ではなく、名詞である。「爸」と「媽」は子供の呼び声に似ているが、上古でも現在でも擬声語と見なす説は見られない。そこで、そのような例は多くあって、長い年月を経るうちに、最初は直接的な模倣³³であっても、自然音から文字への転換過程で、擬声語の語音も語形も全く変わることもある。

一方で、歴史的に安定している擬声語も多くある。これについて、耿二嶺（1986）は、そのような擬声語は古代から踏襲されて現在までも使用されていると指摘した³⁴。例えば、「鳥乃去矣 後稷呱矣」（『詩経・大雅・生民』）の「呱」、「婦子嘻嘻 終吝」（『周易・家人』）の「嘻嘻」、「徒聞唯唯 不聞周舍之谗諛」（『史記・卷043・趙世家』）の「唯唯」などである。それらの擬声語は現在の書き言葉にも話し言葉にも使用されている。

以上のように、擬声語の歴史的な変化には、言語音の増減、語義範囲（模倣対象）の変化が見られる。そして、歴史的な変化の結果として、擬声語は別の品詞に変わって擬声語の属性がなくなることもあり、逆にもともと他の品詞に属していた語彙が擬声語になることもある。

2.2 歴史上の「吧」

筆者が入手した「吧」に関する資料の中で、もっとも古いのは（北）宋代の『廣韻』である。『廣韻』の下平声「麻韻」には、「普巴切」の小韻と「伯加切」の小韻にそれぞれ「吧」が現れる。その解説（義注）は、それぞれ下記の通りである。

普巴切「吧呀 大口兒」

伯加切「吧呀 小兒忿争」

しかし、筆者の調べたかぎり、『廣韻』に載っている「吧呀」は「吧」を第一字とする多音節擬声語のもっとも早い用例である。「吧呀」の構成と意味などを分析して、品詞の種類を究明してみて、単音節擬声語「吧」及び「吧」ではじまる擬声語の研究を進めよう。

『廣韻』に載っている「吧」はbāとpā³⁵の2つの発音を持っている。「吧呀 大口兒³⁶」の「吧」は[p'a]³⁷で、「吧呀 小兒忿争」の「吧」は[pa]と発音する。この2つの「吧呀」の意味はそれぞれ何であろうか。

まず、「吧（[p'a]）呀 大口兒」の「大口兒」は大きく口を開く様子を意味する。それで、「吧（[p'a]）呀」は話す時の口の様態を描写する語であろう。「大口兒」のみの説明を通しては、「吧（[p'a]）呀」が何かの声を模倣しているかどうかを判定できないため、擬声語と見なすことはできない。この時、「吧（[p'a]）呀」は擬態語と見なすことができる。本論では、擬態語は検討の範囲外であるから、「吧（[p'a]）呀」は説明しない。一方、「吧呀 小兒忿争」は、「小兒のいかり争ふこと」³⁸と解説されている。そのため、「吧（[pa]）呀」が「小兒忿争」時の様態を描く可能性も、「小兒」の言い争う声を模倣する可能性も持っている。言い換えると、「吧（[pa]）呀」は擬音語・擬態語両方の意味を持つ語である。

しかし、「吧 ([p'a]) 呀 大口兒」と「吧呀 小兒忿爭」の意味を分析すると、「吧 ([pa]) 呀」は「吧 ([p'a]) 呀」と同じ意味を持っている可能性は低くなる。それで「吧 ([pa]) 呀」の意味には、擬声語の可能性があるとと言える。

次に、擬声語「吧呀」は独立の意味単位であるか、構成部分の「吧」と「呀」は独立の擬声語であるのか。「呀」(本論では「ガ」と読む)は『説文解字』の「卷二上・文十・新附」³⁹の部分で、「張口兒 从口牙聲 許加切」⁴⁰という解説となっている。一方、『廣韻』の下平声「麻韻」では、「呀」に「五加切」と「許加切」の2音があり、解説(義注)はそれぞれ「吧呀」⁴¹と「唵呀 張口兒 又呀呬也」⁴²である。『説文解字』の「張口兒」と『廣韻』の「大口兒」の両者とも、口を開く様子あるいは様態を表している。つまり、これらの「呀」の用例(「呀」ではじまる語)は「吧 ([p'a]) 呀」のように、話す時の口の様子を表していると解釈できる。しかし、単音節語の「呀」の用例はないため、様態面の意味以外、単音節語の「呀」の意味は突き止められない。また、「呀」と「吧」が単音節語あるいは単音節擬声語であるとの記録は見られない。従って、「吧」と「呀」が擬声語であるかどうかはまだ確認できない。「吧 ([pa]) 呀」が独立の語であるかどうか、また、擬声語の属性を持っているかどうかは断定できない。

擬声語は多義性という特徴を持っている。中里理子(2002)はオノマトペの多義性を考察するために、オノマトペの「擬音と擬態の共通性」を論じながら、「多く(擬音語・擬態語-筆者注)は擬音語・擬態語の意味に関連性があり、音とその音が発する状態、さらにそこから連想される様態という意味関係が見られる」⁴³と考えている。つまり、擬声語の言語音と自然音との写像関係は一對多、多対

一などで、複雑である。中国語擬声語の情況も大体同様である。[p'a] もそのような可能性を持っているようであるが、論証のため、別の例を見る必要がある。

しかし、筆者の調べたところ、『廣韻』以後の古辞書、『康熙字典』ほか、『集韻』、『類篇』、『洪武正韻』、『正字通』などの韻書字書⁴⁴などには、「吧」に関する内容があるとはいえ、用例も解説もすべて『廣韻』の例を踏襲している。「吧」や「吧呀」などの語彙の属性を明らかにすることができず、別の用例に頼らなければならない。しかし、「吧」には、[pa] と [p'a] の二つの発音が存在することは確かである。

3 「吧」の発音

『廣韻』の記載によって、「吧」の発音は[pā] と [bā] の二つである。

しかし、現時点まで、「吧 (pā) 呀」あるいは「吧 (pā)」は擬声語であるかどうかはまだ不明である。『廣韻』以降、「吧 [p'a]」に関する記録は『康熙字典』『中華大字典』などのわずかの辞書において、『廣韻』の記録がそのまま踏襲されている。そして、外国人によって編纂された『馬禮遜華英字典』、『馬禮遜五車韻府』、『司登得中英袖珍字典』(1874)など⁴⁵の辞書も同じで、『廣韻』の「吧 (pā) 呀」の記載を踏襲する。そのため、「吧 (pā)」は擬声語と見なされない。

「吧 (bā)」の場合だけは擬声語用字の発音である。『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』、『辞源』などの現代辞書において、「吧」の発音はbāしか収録されていない。

4 擬声語「吧」の意味

4.1 自然音の特徴

擬声語は言語音で意味を表わすものである。擬声語の言語音は自然音を模倣するものである。擬声語の意味は模倣対象の自然音を指す。そのため、擬声語の意味を分析するには、自然音の特徴を説明する必要がある。

擬声語の模倣対象、つまり自然音の特徴をまとめる統一的方法はないが、それについての先行研究は多くあり、基本的な内容は大体似ている。例えば、日向茂男(1991)の『擬音語・擬態語の読本』では、擬音語・擬態語の模倣対象の種類を「人の動き」、「感情・表情」、「物の動き・変化」、「形態・状態」、「音声・擬音」などに分類し、さらに「音声・擬音」を「鳴く・啼く」、「鳴る」、「響く」、「ぶつかる」、「擦れる・軋む・引っ搔く」、「爆発する・弾ける」などに分類している。他の研究では、自然音は一般的に生物(人間と動物)が発する声、自然現象の音、物事が作用して生じる音などに分類することもあるし、音の特徴から、衝撃音、摩擦音、たたく音、破砕音などに分類することもある。

4.2 「吧」の意味の変化

擬声語の歴史的な使用状況についての研究は、唐宋以来の歴史資料により行われてきた。例えば、趙愛武の「唐詩宋詞中的象声詞」⁴⁶と「元曲象声詞研究」⁴⁷、野口宗親の「明代の「象声詞」⁴⁸と「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』」⁴⁹、乔秋穎の「『詩經』擬声詞研究—漢語表音詞の歴史研究之一」⁵⁰などがある。当時代の文献資料などを考査する方法で、「吧」の使用状況を説明するために、先行文献の中の用例を以下に記す。

文康『兒女英雄伝』(1878)⁵¹

- ①先打了一照“回身出來”就抬腿吧的一脚，把那小和尚的屍首踢在那拐角牆邊。(第6回)
- ②用了個“葉底藏花”的架式，吧，只一個反巴掌，早打在他腕子上，揆了開去。(第6回)
- ③輪起右腿甩了一個“旋風脚”，吧，那和尚左太陽上早著了一脚！站脚不住，咕咚向後便倒。(第6回)
- ④這一倒！但見個東西翻在半空裡！從半空打了一個滾兒，吧，掉在地下。(第7回)
- ⑤鄧九公才聽得“十三妹”三個字，早把手裡的酒杯吧的往桌子上一放，說：“老弟，你是怎生杯曉得這個人？”(第15回)
- ⑥不知又說了他一句什麼，他把那個的帽子往前一推，腦子上，吧，就是一巴掌。(第32回)
- ⑦些微使了點勁兒，吧，兩截兒了。(第37回)

上の用例の①②③⑥の「吧」は人の動き(手足の動き)による「音声・擬音」で、「たたく音」の自然音を表わすものである。④⑤は衝撃音を表わし、⑦は「物事が作用して生じる音」(ボタンの破裂する音)を模倣するものである。

筆者の調べたところ、ほかの資料にも、多くの用例があったので、次に記す。

著者未詳『施公案』(1820)⁵²

- ①照著喬三脊背吧的一巴掌，惡奴不防，只聽咕咚一聲，栽于馬下，那馬跑去不表。
- ②說罷照臉就是一掌，只聽吧的一聲響亮。
- ③把右手一揚，單撒手只聽吧的一聲。
- ④只聽吧的一聲，堂倌咕咚倒在地下。
- ⑤薛鳳正要開言，只見薛虎跳將過來，就把李七侯吧的一巴掌。

上記の④以外の擬声語の用例は手で物を「たたく音」を示しており、人の動きの音を表わす擬声語である。この点で、『兒女英雄伝』

用例の特徴は『施公案』と似ている。④には人が倒れて地面に衝撃する音を模倣する擬声語である。

石玉昆『七俠五義』(1879)⁵³

①不想嚴奇剛剛的站起，恰恰的太歲頭就受了此棍，吧的一聲，打了個腦漿迸裂。

著者未詳『小五義』(『忠烈小五義伝』)(1890)⁵⁴

①展爺並不用手接將過去，於是拉齊了，吧的一跺脚，一齊接力走。

②不料自己使得力猛，吧的一聲，把捆靴子帶子迸斷，颯的一聲，把靴子甩出去多遠。

③不料韓天錦一棍打空，也是在氣惱之間，用右手一掃，吧的一聲，正掄在那馬後膝之上。

④拳拳對準毛天壽一撒手，吧的一聲，彈子正中毛天壽的太陽穴。

坑余生『續濟公伝』(1908)⁵⁵

①到了門首，把門撬開，正要進去，後邊吧的一石子，正落在焦雄後腦海之上。

②自己心中驚疑不定，正扭項要進房去，吧的又一石子打來。

『七俠五義』、『小五義』、『續濟公伝』の例を分析すると、すべての「吧」は物が作用して生じる音を表わすものである。それらの音の具体的な特徴は、『小五義』の②は破裂音を表示するのに対して、他はすべて「たたく音」と衝撃音を表わす。その中の『七俠五義』の①は物が作用して生じる音であり、『小五義』の①③は手足の動きの音で、「たたく音」である。『小五義』の④と『續濟公伝』の①②は物が作用して生じる衝撃音を模倣する。

清代に単音節擬声語「吧」が使われはじめた⁵⁶。上述の『兒女英雄伝』、『施公案』(1820)、『忠烈小五義伝』(1890)、『七俠五義』(1879)、

『續濟公伝』(1908)の用例の状況をまとめると、『兒女英雄伝』、『施公案』の中の「吧」は手と足の動作の「たたく音」を表していることは明らかである。『忠烈小五義伝』、『七俠五義』、『續濟公伝』などでは主に事物の衝撃音を模倣している。つまり、単音節擬声語「吧」の初期の用例の大部分は「たたく音」、特に手や足で人などを打つ音声と衝撃音を模倣するものである。人や動物などが発する声と自然現象の音などを模倣する場合はあまり見られない。

次に、現代の資料⁵⁷から、用例を取り出して検討しよう。

魯迅『阿Q正伝』(1921)⁵⁸

①拍，吧～～！他忽而听得一種異樣的声音，又不是爆竹。

老舍『二馬』(1929)⁵⁹

①吧，吧！吧，吧！街坊的大狗叫了几声。你叫什麼？這個世界不是為狗預備的！

②乔治又灌了一氣酒，吧的一声把杯子放在小桌上，又唱起活儿来。

『阿Q正伝』の①は足音⁶⁰の模倣であり、『二馬』の②は物の衝撃音を表わす。その二者は衝撃音の自然音を模倣するものであるから、同じ自然音の特徴を持つということがわかる。『二馬』の①は犬の吠える声を模倣する擬声語である。動物の声を模倣するのは新しい特徴で、筆者の調べたところでは初見である。

当代の資料⁶¹にも、単音節擬声語「吧」の例はある。CCLで調べたところ、次の三つが見つかった。

楊沫『青春之歌』(1958)⁶²

①余永澤在道靜的脸上吧的亲了一下。

金庸『神雕俠侶』(1959)⁶³

①楊過來手奪過，倒轉馬鞭，吧的一声，揮鞭在空中打了個圈子。

劉知俠『紅嫂』(1961)⁶⁴

①她把右手臂往上一揚，吧的一声，吳二抓過來的手象遇到一根鐵棍的迎擊，一下子被格出好遠。

この三つの例はすべて物音を表わすもので、口づけをする音、物の爆裂音と衝撃音である。清代以来の例と比べてみると、これらの自然音は特別な変化が見られない。

上述の例から単音節擬声語「吧」の擬声特徴をまとめて言えば、現代以降の資料には、犬などの動物のなき声を表す場合が見られる。物の衝撃音、人の動作による音は依然としてあり、ゆえに、模倣の対象は以前より豊富になったようである。例えば、人の動作に関連する音には、手や足の動作と関連する音のほか、口づけをする音もある。動物のなき声の用例は少数であるが、新しい特徴として、老舍の『二馬』に出現し始めている。従って、擬声語「吧」の擬声対象は減ったり増えたりするので、擬声の適用範囲が時代により変化していることが指摘できる。

最後に、擬声語「吧」の近義語について補記する。『現代漢語辞典』、『象声詞詞典』、『中国語擬音語辞典』などの辞書に載っている例から見ると、擬声語「吧」と「叭」は通用できる時もある。しかし、通用語の間には意味の差異が存在するかどうかははっきりしていない。そのため、通用語は擬声語の意味の変化に影響しないのかという疑問が生じることが避けられない。類似の状況が古今にもあるので、擬声語の通用語が多く存在するのは「擬声詞詞形的規範，是擬声詞規範的重点（耿二

嶺：1986)』⁶⁵ということの理由の一つになるかもしれない。

5 おわりに

本論では主に単音節擬声語の「吧」を例として擬声語の歴史的な使用状況を見てきた。その考査によって、擬声語の語音、語形、語義の歴史的な使用の変化状況を概観し、擬声語の変化の特徴を明らかにした。

まず、(単音節)擬声語「吧 [pa]」の音声模倣範囲(自然音の特徴)は歴史とともに変わってきた。多音節擬声語の「吧呀」は『広韻』などの古辞書に記載されるのみで、現在は使用されていない。発音の面から見ると、擬声語の「吧 (bā)」は現在まで使用されている。しかし、「吧 (pā)」と発音する場合は擬声語であるかどうかはまだわからない。そのため、「吧 (bā)」の変化研究だけによって、擬声語の発音の生滅の状況をまとめることは難しい。

次に、擬声語「吧」の考査の上で、擬声語全体の変化状況を概観してみると、語音の歴史的な変化の表現に伴って、擬声語の発音も変化したと考えられる。擬声語は言語音で自然音を表わすため、その差異による言語音と自然音の既存の対応関係も変化した可能性がある。つまり、一つの擬声語は歴史の中で模倣対象が変わるということである。もう一つの変化は擬声語の通用語現象である。単音節擬声語も多音節擬声語もいくつかの通用語を持つことが見られる。一体多、多対一などの複雑な写像関係(言語音と自然音の関係)は擬声語の変化の表現の一つである。通用語現象はその変化の原因の一つかもしれない。と同時に、そのために、擬声語の使用は規則性がなくなるようである。従って、擬声語の使用が規則的であるのは注意しなければならない

い。

擬声語の歴史的な変化について、本論で取り上げたのは「吧」だけで、用例もわずかで

あり、論説の問題点もたらない。擬声語の変化の特徴を全面的に把握するためには、さらに検討を行う必要がある。

【注】

- ¹ 日本語の訳文は山内貴美夫／トゥリオ・デ・マウロ訳版の『ソシュール一般言語学講義校注』（而立書房1976年88頁）を引用。英語版はF・de Saussure『Course in general linguistics』（外語教育出版社 杰拉尔徳・达克沃斯出版社2001年）を参考。
- ² 同上90頁
- ³ 言葉で自然音を模倣して表現する時、一般的に話し言葉の形式で行われるから、最初の擬声語は話し言葉の擬声語の意味を表わす。
- ⁴ 類似の論説は山口仲美（『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社 2003年）の研究がある。「擬声語・擬態語の一般的な意味や用法、語形のみならず、その語の語源や形態的な面、更には意味的な面に関する歴史的な推移に研究上の焦点を当てている。そして従来の擬声語・擬態語辞典においても扱われていたオノマトペの統語的な用法や意味解説、その語の同類語に対して、文化や歴史に基づいた解説を加えるという新たな試みも行っている」と山口は述べている。
- ⁵ 擬声語の言語音と自然音の関係とは、擬声語の発音と意味の関係を指す。
- ⁶ 耿二嶺『漢語擬声語』湖北教育出版社 1986年 157-158頁
- ⁷ 『中国語文』（第2期）144-146頁 1981年
- ⁸ 『熊本大学教育学部紀要人文科学』第42号 1993年 1-11頁
- ⁹ 『熊本大学教育学部紀要人文科学』第46号 1997年 1-12頁
- ¹⁰ 『著名言語学家自選集・馬慶株卷』安徽教育出版社 2002年 229-261頁
- ¹¹ 『安徽師範大学学報（人文社会科学版）』第40巻第1期 107-112頁
- ¹² 『方言』第3期 174-180頁
- ¹³ 『当代語言学』第14巻第4期 354-364頁
- ¹⁴ 『中国語文』第3期 167-171頁
- ¹⁵ 『ことばの科学』名古屋大学言語文化部言語文化研究会 第14号107-118頁
- ¹⁶ 『比較社会文化研究』第35号 41-52頁
- ¹⁷ 王冠華（2004）「日本語の擬音語・擬態語の中国語訳の表現について」『経営研究』愛知学泉大学経営研究所 [編] 第17号（通号44号）260頁
- ¹⁸ 儲泰松（2012）「普通話擬聲詞の語音規律及其

例外」（『安徽師範大学学報』人文社会科学版 第40巻第1期107頁）の調査を参考。

- ¹⁹ 方言と古代語の擬声語もいくつか入っている。
- ²⁰ 趙愛武（2014）の「漢語象声詞的語義与標写形式」『武漢大学学報（人文版）』第67巻 第2期 105頁）によれば、擬声語の標写形式は擬声語の用字情況と形態の特徴を指す。
- ²¹ 趙愛武（2014）は、铮铮／琤琤、吧哒／吧嗒などの用例を出して音同形異を、撲同／撲洞、跔跔／吉跔跔などの用例を挙げて「音近形異」を、それぞれ説明している。音同形異は発音が同じで、語の用字が異なる擬声語を指し、一方「音近形異」は発音が似ており、語形が異なる擬声語を指す。
- ²² 「吧」は名詞と見なされて使用される場合もある。主に外来語の訳文に出る。
- ²³ 「吧嗒」は、筆者の入手した資料のうち、『漢語大詞典』にのみ収録されている。「嗒」は「哒」の古い用字であるので、ほかの辞書などには一般的に「吧哒」で載っている。
- ²⁴ 通用とは『漢語大辞典』で、（単字の場合）用字が違うが、発音が同じあるいは意味が近い語が互いに代わって使用されることである。通用語は互いに代替され使用されるものである。擬声語の場合は主に発音が同じである。
- ²⁵ bā と pā の二つの発音がある。
- ²⁶ このような考えは耿二嶺（1986）にも見られる。『漢語擬声語』の158頁で、「我們有必要了解一下擬声詞一詞多形的歷史狀況和現狀」と述べている。
- ²⁷ 『漢語大詞典』、『現代漢語詞典』などの現代辞書による。
- ²⁸ 『廣韻』は中国の音韻書。5巻。北宋の真宗帝の勅命により、陳彭年らが『廣唐韻』の校訂のもとに編纂し、大中祥符元年（1008年）に「大宋重修廣韻」と名を変えた。（李新魁、麦軫『韻学古籍述要』陝西人民出版社 1993年より）
- ²⁹ その二つの例の具体的な説明は下文で論じる。
- ³⁰ 「吧（bā）」という発音が清代に使用される情況は後で説明する。
- ³¹ 発音（言語音）と意味（自然音）の関係の面で、近似あるいは同じ特徴を持つ擬声語を指す。
- ³² 「擬声詞散論」『語文研究』第1期 17頁による。
- ³³ ここでは、「直接擬声」と言ってもよい。趙毅衡・

- 胡易容の『符号学: 傳媒学辞典』(南京大学出版社 2012年)によれば、「直接擬聲指的是動物的聲音與意義基本吻合, 能夠直接產生音義之間的相互聯想」(209頁)である。
- ³⁴ 『漢語擬声詞』(湖北教育出版社1986年 128頁)を参考にする。
- ³⁵ このローマ字のピンインの表記は『康熙字典・標点整理本』(漢語大詞典出版社 2002年 105頁)の標記法である。『康熙字典・標点整理本』は「吧」の項目で『廣韻』の「吧呀」の2例を解説して、「吧」の発音をbā とpāと表記する。
- ³⁶ 「兒」は「貌」の古い字である。
- ³⁷ この音声表記はIPA標記法である。以下同じである。
- ³⁸ 「小兒のいかり争ふこと」は「小兒忿争」の訳文である。この訳文は『大漢和辞典 卷二』(諸橋轍次著 大修館書店 2001年) 864頁の「吧」の項目を引用した。
- ³⁹ 「新附」は、宋太宗雍熙年間、徐鉉らが『説文解字』の内容を修正・補充した時、『説文解字』に載っていなかった字を添付した部分である。それらの文字は「新附字」といい、計402字ある。(王力『中国語言学史』五南図書出版 1996年 109頁より)
- ⁴⁰ 『叢書集成初編 説文解字(五冊)』中華書局 1985年 45頁
- ⁴¹ 『宋本廣韻・永祿本韻鏡』江蘇教育出版社 2005年 47頁
- ⁴² 『宋本廣韻・永祿本韻鏡』江蘇教育出版社 2005年 48頁
- ⁴³ 「オノマトペの多義性と意味変化—近世・近代の「まじまじ」を例に一」『上越教育大学研究紀要』第22巻 第1号 281頁
- ⁴⁴ 中国文化大学楊義騰の博士論文『「正字通」與歷代重要字書之比較研究』によれば、『説文』『字林』『玉篇』『干祿字書』『佩觿』『類篇』『字通』『字鑑』『字彙』『正字通』『字彙補』などは重要な古代字書である。散逸の状況と文献の内容の特徴を考えると、実際によく利用されるのは『説文』『玉篇』(『宋本玉篇』)『類篇』『字彙』『正字通』である。韻書では、『廣韻』がよく利用されている。
- ⁴⁵ 『馬禮遜華英字典』(英国東印度公司澳門印刷廠 1815-1823)は『康熙字典』を底本とし(蔡祝青「文学觀念流通の現代化進程: 以近代英華/華英辭典編纂literature詞條為中心」『東亞觀念史集刊』2012年第3期275-335頁による)、『馬禮遜五車韻府』(1819-1820) (1865版参考)は陳蘆謨(明)の『五車韻府』を底本とし(萬獻初『「五車韻府」文獻源流與性質考論』『文獻』2015年 第3期 166-176頁による) 編纂された。
- ⁴⁶ 『湖北師範學院學報(哲學社會科學版)』2012年 第2巻 第2期 42-45頁
- ⁴⁷ 『語言學研究・語文知識』2012年 第2期 34-35頁
- ⁴⁸ 『熊本大學教育學部紀要人文科學』第46号 1997年 1-12頁
- ⁴⁹ 『熊本大學教育學部紀要人文科學』第42号1993年 1-11頁
- ⁵⁰ 『徐州師範大學學報』第28巻 2002年 第1期 14-17頁
- ⁵¹ 北京大學中國語言學研究中心(CCL)のコーパスを利用して、底本を参考にした。
- ⁵² 同上
- ⁵³ 同上
- ⁵⁴ 『小五義』の中に、単音節擬聲語「吧」のほか、重疊型の「吧吧」の用例もある。例えば、「説畢, 吧吧幾下馬鞭子, 胯下一蹬勁, 那馬似飛地跑去了」、「説罷以鞭高揚, 吧吧打幾鞭, 打得賊人疼痛難忍」。
- ⁵⁵ 北京大學中國語言學研究中心(CCL)のコーパスを利用して、底本を参考にした。
- ⁵⁶ 筆者の調べたところでは、清代以前(宋代、元代、明代など)の多音節擬聲語の「吧呀」と単音節擬聲語「吧」の用例はまだ入手できていない。それは擬聲語「吧」の歴史的な研究にとって大切であるが欠けているため、今後さらに多くの資料を探す必要がある。
- ⁵⁷ この「現代」は中国語で歴史の時期をいう言葉で、1919年~1949年を指す。この時期の資料の調査は北京大學中國語言學研究中心(CCL)のコーパスを利用して底本を参考にして行った。下文の「当代の資料」で使用したコーパスも同様である。
- ⁵⁸ 北京大學中國語言學研究中心(CCL)のコーパスを利用して、底本を参考にした。
- ⁵⁹ 老舍『二馬』の中に、重疊型擬聲語「吧吧」が出現した。「拿破侖(犬の名前一筆者注)向馬威吧吧了两声」「車後面突突的冒着藍煙, 車輪磁拉磁拉的響, 喇叭也有仆仆的, 有的吧吧的乱叫」。(動物の)声を模倣しているという点で、それは南宋の「吧吧(的)」と最も似ている意味を持っている用法である。
- ⁶⁰ ここの「吧」は銃声であるという可能性もある。
- ⁶¹ この「当代」は中国の1949年以降を指す。
- ⁶² 北京大學中國語言學研究中心(CCL)のコーパスを利用して、底本を参考にした。
- ⁶³ 同上
- ⁶⁴ 同上
- ⁶⁵ 擬聲語の語形が擬聲語を標準に合わせることに、とって重点なことである一筆者訳。

【参考文献】

【英語参考文献】

F・De Saussure『course in general linguistics』（英語版）外語教育出版社 杰拉尔德・达克沃斯出版社 2001年

【日本語参考文献】

寿岳章子『擬声語の変化』『西京大学学術報告・人文』通号7 36-50頁1956年
 武田みゆき『中国語にみる共感覚についての一考察—擬音語の擬態語化を巡って—』『ことばの科学』名古屋大学言語文化学部言語文化研究会 第14号 107-118頁2001年
 中里理子「オノマトベの多義性と意味変化—近世・近代の「まじまじ」を例に—」『上越教育大学研究紀要』第22巻第1号268-282頁2002年
 トゥリオ・デ・マウロ・山内貴美夫訳『ソシール一般言語学講義較注』而立書房 1976年
 野口宗親「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第42号1-11頁1993年
 野口宗親「明代の「象声詞」」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第46号1-12頁1997年
 野口宗親『中国語擬音語辞典』東方書店1995年
 野間秀樹「オノマトベと音象徴」『言語』大修館書店第30巻12-18頁2001年
 日向茂男『擬音語・擬態語の読本』小学館1991年
 安本武正「中国語の擬声語・擬態語論について—日本の場合—」『八戸工業大学紀要』第6巻212-222頁2012年

【中国語参考文献】

陳北郊「擬声詞散論」『語文研究』第1期17-21頁1989年
 儲泰松「普通話擬聲詞的語音規律及其例外」『安徽師範大學學報』人文社會科學版 第40卷第1期 107-112頁2012年
 耿二嶺『漢語擬聲語』湖北教育出版社1986年
 龔良玉『象聲詞詞典』貴州教育出版社1991年
 李鏡兒『現代漢語擬聲語研究』學林出版社2007年
 馬慶株「擬聲語研究」『著名中年語言學家自選集・

馬慶株卷』安徽教育出版社 1998年
 孟琮「北京話の擬声詞」『語法研究和探索（01）』北京大學出版社120-156頁1983年
 乔秋颖「『詩經』擬声詞研究—漢語表音詞の歴史研究之一」『徐州師範大學學報』第28卷第1期 14-17頁2002年
 王冠華「日本語の擬音語・擬態語の中国語訳の表現について」『経営研究』愛知学泉大學経営研究所〔編〕第17号（通号44号）257-279頁2004年
 王洪君「漢語語音詞的韻律類型」『中国語文』第3期 167-171頁1996年
 楊義騰「『正字通』與歷代重要字書之比較研究」中國文化大學博士論文2013年
 趙愛武「漢語象聲詞的語義與標寫形式」『武漢大學學報（人文版）』第67卷第2期104-108頁2014年
 趙金銘「元人雜劇中的象聲詞」『中国語文』第2期 1981年
 趙寅秋『擬音語の擬態語化についての日中対照研究—日本語「ABAB」型オノマトベ兩用語と中国語「ABB」型形容詞を例として—』『比較社会文化研究』第35号 41-52頁2014年
 朱德熙「潮陽話和北京話重疊式象聲詞的構造」『方言』第3期 174-180頁1982年
 竺家甯「論擬声詞聲音結構中的邊音成分」『当代語言學』第14卷第4期 354-364頁1995年
 『辞源（修訂本）』建国60周年記念版 商務印書館 2009年
 『叢書集成初編 說文解字（五冊）』中華書局 1985年
 『康熙字典・標点整理本』漢語大詞典出版社 2002年
 『漢語大詞典・第3卷』漢語大詞典出版社 1989年
 『漢語大字典（第二版）』湖北長江出版集團 崇文書局など 2010年
 『集韻附索引』上海古籍出版社 1985年
 『宋本廣韻・永祿本韻鏡』江蘇教育出版社 2005年
 『現代漢語詞典（第5版）』商務印書館2005年
 『現代漢語大詞典』上海辭書出版社 2006年
 許慎著 段玉裁注『說文解字注』上海古籍出版社 1981年